

ポンオコツナイ川水系河川整備基本方針

平成 20 年 9 月

北 海 道

ポンオコツナイ川水系河川整備基本方針

目 次

1.	河川の総合的な保全と利用に関する基本方針	1
(1)	流域及び河川の概要	1
(2)	河川の総合的な保全と利用に関する基本方針	3
2.	河川整備の基本となるべき事項	5
(1)	基本高水並びにその河道及び洪水調節施設への配分に関する事項	5
(2)	主要な地点における計画高水流量に関する事項	5
(3)	主要な地点における計画高水及び計画横断形に係る川幅に関する事項 ..	6
(4)	主要な地点における流水の正常な機能を維持するために必要な流量 に関する事項	6
(参考図)	ポンオコツナイ川水系流域概要図	7

1. 河川の総合的な保全と利用に関する基本方針

(1) 流域及び河川の概要

ポンオコツナイ川は、北海道網走支庁管内雄武町の標高約 100m の丘陵にその源を発し、東へ流れ、雄武町市街地を流下して雄武漁港南東側からオホーツク海に注ぐ、流域面積 2.8km²、流路延長 3.7km の二級河川である。本流域は、全域が雄武町に含まれている。

河川名は、雄武町史によるとアイヌ語の「ポン・オ・ウ・コツ・ナイ（小さい・川尻・互いに・くつつく・沢川）」に由来しており、かつてポンオコツナイ川がオコツナイ川と河口付近で合流していたことを意味している。

ポンオコツナイ川の流域は、畑が約 50% を占め、中上流域は主に牧草地などに利用されている。下流域は市街地が形成され、学校、病院などの重要施設があるほか、網走市を起点として紋別市を通り稚内市に至る国道 238 号が横断しており、オホーツク沿岸の市町村が結ばれている。

流域の地形は、標高 100～170m の第 1 段丘、40～70m の第 2 段丘、20～30m の第 3 段丘、7～10m の第 4 段丘と 4 段の海岸段丘が形成されており、ポンオコツナイ川はそれらの段丘面を侵食し谷地形を形成して流下している。

流域の地質は、新第三紀中新世の元稲府熔岩（流紋岩）からなり、第 2 段丘から第 4 段丘には、基盤岩の元稲府熔岩を被覆して、粘土、砂、礫からなる第四紀更新世の段丘堆積物が広く分布している。

流域の気候は、オホーツク海型気候に属し、年間を通じてオホーツク海高気圧の影響を受ける。年平均気温は、約 5℃ と道内でも比較的気温の低い地域である。年間降水量は約 900mm と道内では比較的少なく、累計積雪深は約 300cm と道内では平均的な地域である。また、1 月頃には、シベリア方面より流水が南下して接岸し河口を覆うことがある。

ポンオコツナイ川の治水事業は、昭和 38 年から昭和 40 年にかけて、都市下水路事業により河口から上流 680m 区間に積ブロック護岸やボックスカルバートなどを設置したが、昭和 54 年 10 月の台風 20 号により雄武町市街地において浸水家屋 7 戸、平成 10 年 9 月の台風 5 号により浸水家屋 14 戸、平成 13 年 9 月の豪雨により浸水家屋 7 戸と度重なる洪水被害を受けている。このため、平成 14 年から平成 15 年にかけて、雄武町が護岸の嵩上工事を行ったが、抜本的な河川改修ではないため、依然として流下能力が不足している。

ポンオコツナイ川では、現在のところ水利用はない。

河川空間の利用については、下流域の大部分で河道が暗渠構造となっており、開水路になっている区間においても河岸が積ブロックなどで護岸され、家屋の間を流れているために、

人は川の中に入ることが出来ず、橋上から川を望むことが出来る程度である。

ポンオコツナイ川の上・中流域のうち、宮の森公園から上流は川の近くまで牧草地やカラマツの植林地として利用されているが、その下流はオノエヤナギやケヤマハンノキなどで構成される河畔林が分布し、ハシブトガラ、ヒガラなどの鳥類が見られ、樹上にはトビの営巣地が確認されているほか、エゾシカ、キタキツネ、エゾアカガエルなどの哺乳類や両生類が生息している。川の中には、フクドジョウ、ヤチウグイなどの魚類が生息している。

下流域は雄武町市街地となっており、植生はほとんど見られないが、空き地にはエゾナミキソウの群落が確認されている。鳥類はハシボソガラス、ハシブトガラス、スズメなどの一般に市街地で見られる種が多く、哺乳類や両生類、は虫類などは確認されていない。川の勾配は 1/50 程度と急勾配であり、積ブロック護岸とコンクリート河床の三面張りになっており、落差工も設置されているが、フクドジョウが確認されている。

水質に関しては「公共用水域における生活環境の保全に関する環境基準」による類型指定はされていないが、平成 18 年の調査では中下流部の BOD 値が 0.6~1.1mg/l で、AA~A 類型相当となっている。

(2) 河川の総合的な保全と利用に関する基本方針

河川の総合的な保全と利用に関する基本方針は、水害の発生状況、治水の現状、河川の利用状況、周辺の土地利用状況並びに河川環境を考慮し、周辺地域の社会・経済情勢との調和に十分配慮して、水源から河口まで一貫した計画のもとに、河川の総合的な保全と利用を図るものとする。

災害の発生の防止又は軽減に関しては、ポンオコツナイ川流域が持つ社会・経済的な重要度と道内の他河川とのバランスを図りつつ、河道の掘削や暗渠の開水路化などにより河積を増大させ、計画規模の降雨による洪水の安全な流下を図るものとする。

整備途中段階における施設能力以上の洪水や計画規模を上回るような洪水に対しては、迅速な対応が可能となるよう、水防管理者等の関係機関に対し河川情報等の確実な伝達やハザードマップ作成の支援等を行い、洪水被害の軽減を図るものとする。

河川の適正な利用及び流水の正常な機能の維持に関しては、現在のところ水利用はないが、今後とも健全な水循環の確保の観点から関係機関などと連携を図りながら、適正かつ合理的な水利用が図られるよう努めるものとする。また、今後、水量・水質の把握に努め、魚類等の生息する良好な水環境の保全が図られるように努めるものとする。

河川環境の整備と保全に関しては、市街地の広がる下流域においても魚類が確認され、上流域には多くの動植物が生息・生育していることから、暗渠の開水路化や河道の縦断的な連続性に配慮するなど良好な河川環境の整備と保全に努めるものとする。また、散策路として利用できる管理用通路の整備など、水辺と親しめる河川空間の整備を地域と連携して行い、親水性の向上を図るものとする。

景観に関しては、流域の自然や社会特性、周辺の土地利用状況、地域のまちづくり計画などを踏まえ、雄武町市街地における景観と河川が総合的に調和するよう、親しみやすい川づくりを行い、家屋の立地する市街地の景観が保たれるよう努める。なお、実施にあたっては、時間の経過を考慮して、周辺の風景になじむよう施設の配置、形態・材料・色彩などの選定に努める。

河川の維持管理については、災害の発生の防止、河川の適正な利用、流水の正常な機能の維持、河川環境の整備と保全等の総合的な観点から、必要な措置を講ずるなど、適切な実施に努める。また、治水としての機能や環境への影響を考慮したうえで、河道内の樹木や堆積土砂の適正な管理を行うものとする。

また、河川に関する情報を地域住民に幅広く提供、共有することなどにより、河川管理者と地域住民との連携、河川に対する愛護精神の育成、環境教育の支援並びに住民参加による

河川管理が図られるよう努めるものとする。

なお、以上の実施にあたっては、地域住民や各分野の専門家の意見を踏まえながら、河川の総合的な保全と利用に努めるものとする。

2. 河川の整備の基本となるべき事項

(1) 基本高水並びにその河道及び洪水調節施設への配分に関する事項

基本高水のピーク量は、平成6年8月及び平成10年9月の既往洪水を考慮して、雄古都橋基準地点において $20\text{m}^3/\text{s}$ とする。

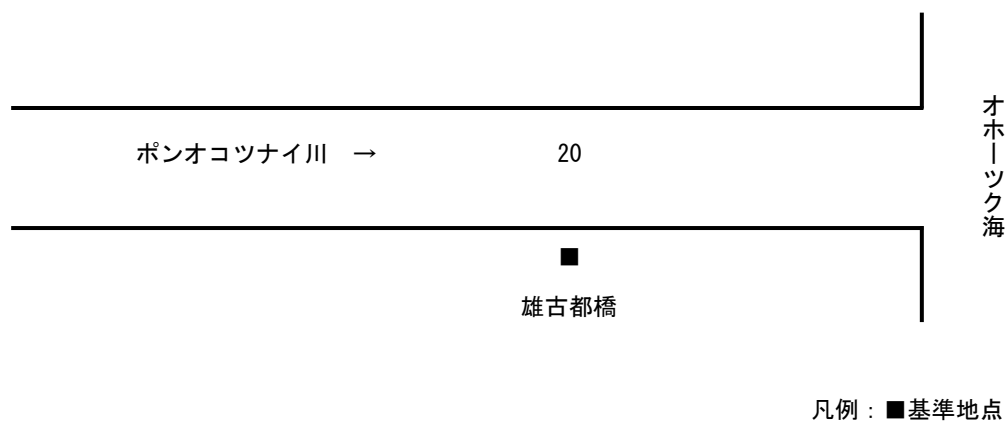
基本高水のピーク流量等一覧表

単位： m^3/s

河川名	基準地点名	基本高水のピーク流量	洪水調節施設による調節流量	河道への配分流量
ポンオコツナイ川	雄古都橋	20	—	20

(2) 主要な地点における計画高水流量に関する事項

ポンオコツナイ川における計画高水流量は、雄古都橋基準地点において $20\text{m}^3/\text{s}$ とする。



計画高水流量配分図 (単位： m^3/s)

(3) 主要な地点における計画高水位及び計画横断形に係る川幅に関する事項

本水系の主要な地点における計画高水位及び川幅は次表のとおりとする。

主要な地点における計画高水位及び川幅一覧表

河 川 名	地点名	河口からの 距離 (km)	計画高水位 T.P. (m)	川 幅 (m)
ポンオコツナイ川	雄古都橋	0.47	10.12	5

(4) 主要な地点における流水の正常な機能を維持するため必要な流量に関する事項

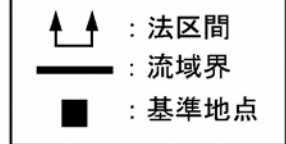
ポンオコツナイ川において水利用はなく、また、渇水被害が生じた事例もない。

流水の正常な機能を維持するため必要な流量については、今後、流況等の調査を行い、動植物の保護、流水の清潔の保持等を考慮し調査検討を行ったうえで定めるものとする。

位置図



凡 例



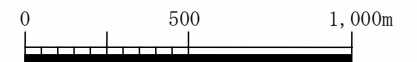
雄武町

ポンコツナイ川→

国道238号線



オホーツク海



ポンコツナイ川水系 流域概要図